

漆工町 木曾平沢

木曾平沢は、慶長3年(1598)に奈良井川の左岸にあった道が右岸に付け替えられたことを契機に、周辺の山林付近に生活していた人々がその道沿いに居住することで、集落が形成されていったと考えられています。この道は、古代中世では吉蘇路や木曾路などといわれていましたが、徳川幕府によって、中山道の一部として整備されました。近世には、奈良井宿の在郷として位置づけられ、檜物細工、漆器の生産で生計を立ててきました。木曾漆器の製作上重要な素材のひとつである良質な鋳土が確保できることから、明治の初め頃から産業としての基盤が確立し、漆工町として発展していきます。大正13年には新たな街路が中山道の西側に築かれ、金西町として拡大しました。

これらの歴史的景観と、漆工という伝統工芸の職人町として木曾平沢は、平成18年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。



□上町 明治29年(1896)の大火によって、街路に面するかなりの建物を失っていて、比較的新しい建物で構成されている

□中町 近世末に遡る出梁造の建物から、昭和初期の洋風建築、二階を持ち出さない建物などバラエティーに富んだ景観をみせる

□下町 道が湾曲し高低差があるため、雁行する木曾平沢の特徴が明らかで、立体感のある町並みになっている

□金西町 大正時代に道ができたことから、それ以降の建物で構成されているため、建物の立ちが高く、中山道側からは裏手であるため、ガレージや蔵が垣間見える

重要伝統的建造物群保存地区とは

文化財保護法の中に定められる、「伝統的建造物群保存地区制度」によって町並みが保存されている地区です。町並みとして保存していくため、保存地区内では、新築、増改築、修繕、色彩変更等、外観に影響する現状変更に関しては許可が必要です。また、伝統的な建築物はその特性を維持するため変更に際しての規制があり、新しい建築も周囲の町並みと調和するよう意匠の基準が設けられています。

漆工町 木曾平沢 町並みの特徴

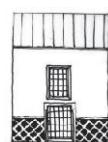
① 建物が雁行し、前面にアガモチを持つ

中山道が部分的に湾曲しているため、地割が街路と直角ではない。それゆえ、自然と建物は雁行して建ち、側面が連続して見えることとなる。また、街路と建物の空地は寛延2年(1749)の大火後、尾張藩により3尺ずつセットバックさせられたものである。しかし、所有はあくまでも私のもの（「吾持カ」）という意からアガモチと呼びならわされている。



雁行する建物とアガモチ

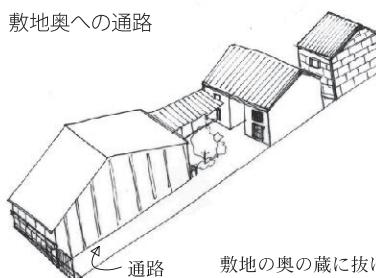
② 作業場としての土蔵



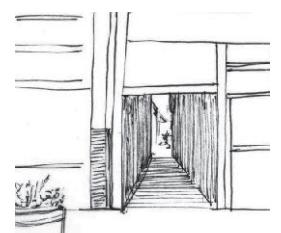
土蔵を漆器産業の作業場として使っている。漆器作りには湿度と温度が重要であり、土蔵の内部は湿度、温度が安定しているため、作業に適している。



③ 敷地奥への通路



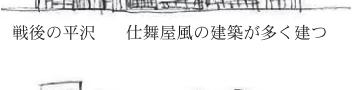
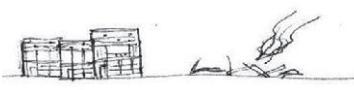
敷地の奥の蔵に抜けるための通路又はドジ(通り土間)が通りの東西どちら側の家も南側にある。



④ 各時代の建物が存在する

江戸時代の出梁造だけではなく、大正時代から戦前にかけての建物や戦後の建物など、各時代の特徴的な建物が併存している。

木曾平沢の町並みとの出会い



木曾平沢では、漆器職人の住まいと作業場が敷地内に存在します。元々、漆器の商店ではなく、行商で日本各地にサンプルを持って売りに行っていたそうです。

漆器産業の発展とともに、家の表側を店にする家、瓦葺きの家、高さが高い建物が建ったりと、変化してきました。

明治時代にも大火があり、江戸時代の建築はそれほど多くありませんが、昭和の漆器産業が盛んな時期の工夫が見られる建築が多く残っています。また、今でも作業場として敷地奥の土蔵を使っている家も多くあり、職人の町を肌で感じることができます。

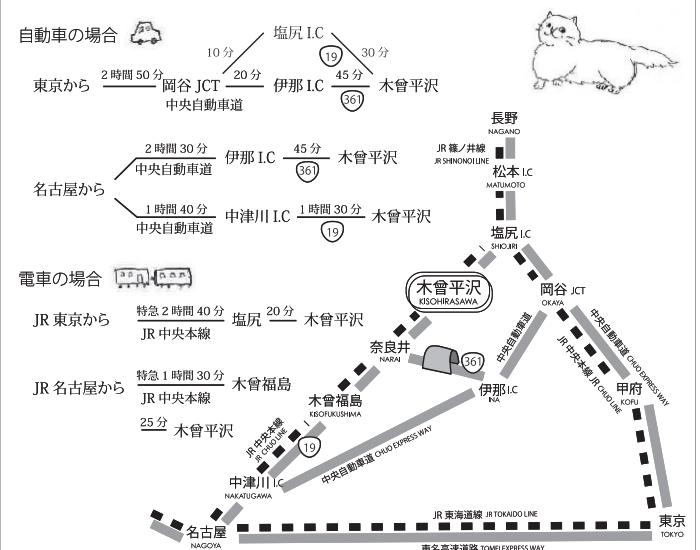
裏通りや小路を積極的に歩いてみてください。表通りでは発見できない魅力に気づくでしょう。漆器は紫外線に弱いので、店の中は暗くなっていますが、戸が開く商店は開店していますのでぜひ覗いてみてください。敷地の奥に素敵な庭を見発したり、土蔵がいくつもあったりと、思わず出会いがあるはずです。

重伝建に選定され、これから次々と整備がなされています。次に来たときには、漆工町としての特徴がよりはっきり現れているでしょう。これからの木曾平沢が楽しみですね。



木曾平沢までのアクセスマップ

Access & Guide MAP



発行：木曾平沢町並み保存会 <http://www.kisohirasawa.jp>

このマップの内容は、平成19年10月に取材したもので。

Design: Hiromi Hashizume

